夢・希望そして輝く笑顔、学校が心の居場所であるために

―温かい雰囲気のある学校づくり支援プロジェクト―

いの町立伊野南小学校　　教　　諭　西村　一輝
高知県心の教育センター　指導主事　徳永智恵子

心の教育センターでは、新事業「温かい雰囲気のある学校づくり支援プロジェクト」を立ち上げた。教育委員会と連携しながら専門性のある支援を特定の地域に提供することで、その市町村の教育課題解決にかかわるためである。そこで、当センターが提供できる支援メニューを用意し、各校が選択した内容について研修会を実施した。また、担任の要請により支援授業も行った。

その結果、学級の状態や児童生徒間の人間関係が明らかとなり、気になる子どもへの支援の方法を全教職員で考えるようになった。そして、教職員の共通理解が深まり温かい雰囲気のある学校づくりが推進されている。

キーワード：支援プロジェクト、教育課題解決、温かい雰囲気のある学校、教員の意識

本研究と教育改革の関連

平成９年度からスタートした土佐の教育改革もいよいよ総仕上げの時期である。第２期土佐の教育改革は、子どもたちの基礎学力の定着と学力の向上など６つの取組の柱を定め、進められてきた。本年度と次年度は、焦点を絞った行動計画のもと、総仕上げの時期である。

心の教育センターは、平成 12 年４月、豊かな心を育む教育の推進のために心を育てる学校づくりや不安や悩みを抱える子どもたちへの支援のため、教育センターの新しい部署として開設されて以来、県内全域を対象に様々な事業を展開してきた。その取組の中で、毎年、学校や教育関係の諸団体への支援として、要請を受け職員研修や児童生徒を対象とした出前授業・保護者対象の講演会等をしてきた。しかし、本県の現状を見ると、不登校や暴力行為・いじめなどの教育課題は、発生件数割合が全国平均より高い水準で推移しており、憂慮される状態は続いている。

そこで、本年度『温かい雰囲気のある学校づくり支援プロジェクト』事業を立ち上げた。市町村が抱えている教育課題の解決にどのような支援が有効かを知るため、今まで学校や地域・保護者に提供してきた内容を精選して具体的な研修メニューとして提案し、積極的かつ集中的にかかわった。また、取組を検証するためにアンケートを実施した。

子どもたちが楽しく学校生活を送ることができるように、温かい雰囲気のある学校・学級をつくることは必要不可欠のことである。土佐の教育改革の６つの柱の根幹をなすことといえる。本プロジェクト事業を検証し、より学校のニーズにあった支援としてまとめ、次年度以降、県内の他市町村支援へ広げていくことは、本県のさまざまな教育課題の解決につながっていくことと考える。

１　はじめに

現代の日本の家庭が抱える深刻な病理現象には、「離婚」の増加や「虐待」、いくつもの原因が複雑に重なり合っている「ひきこもり」や「不登校」、そして社会的な「ニート」といわれる若者たちの増加が挙げられる。その要因には、行き過ぎた個人主義や教育力の低下、家庭教育の喪失や家族関係の不全などが指摘される。

社会の変化は直接的にも間接的にも学校に影響を与えた。友達とかかわりたくない、会話による意思疎通が苦手、思い通りにいかないと切れる。自分勝手にしかふるまえないなどの問題を抱える子ど

もが増加した。また、大きな社会現象として、登校しぶりから不登校になるケースがある。家庭と学校側との密なる連携により、「不登校」という現象に適切に対応していかなければならない。

本来の不登校対策とは、児童生徒が不登校とならない未然防止策であるべきだと考える。そのために、教職員は魅力のある学校づくりを主体的に目指すことが重要となる。児童生徒にとって、魅力のある学校とは、自己が大事にされている、認められているという自分の存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる「心の居場所」である。さらに、教師や友人との心の結び付きや信頼感の中で主体的な学びができ、共同の活動を通して社会性を身に付けることができる。「絆づくりの場」である。

全ての児童生徒にとって、学校を安心感・充実感の得られる生き生きとした活動の場とすること、不登校の傾向が見え始めた児童生徒に対して、不登校状態になることを抑止できる学校であることを目指すことが重要だと考える。

そのためには、まず新学習指導要領のもと、各学校が創意工夫に満ちた特色ある教育課程を編成する必要が望まれる。特に学級活動、児童会・生徒会活動、学校行事等の特別活動の充実は学校生活の基盤や所属意識を高める観点から重要と考える。また、活動の場を学校内に限定することなく地域の様々な場で活動を展開するとともに、外部の多様な人材の協力も得るなど、地域社会の教育力や専門機関を積極的に活用していくことも重要だと考えている。

このようなことから、不登校の未然防止という観点を重視するならば、各学校は各専門機関に今後一層の質・量両面の提供を期待しているはずである。同時に、専門機関も一層の存在や支援内容等について積極的に周知し働きかけるなど、主体的な活動を行う必要がある。

2　研究目的

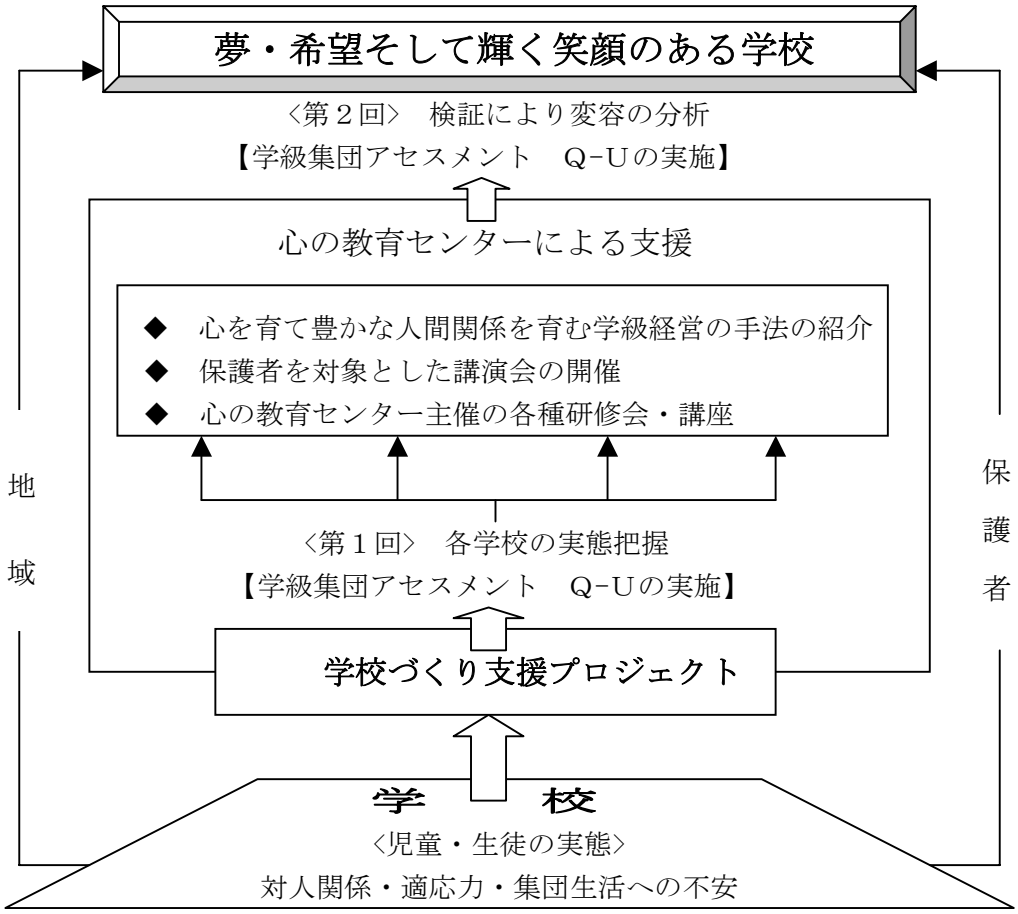


図１　研究構想図

・　土佐市を指定地域とし、該当教育委員会と連携を図りながら、土佐市の教育課題の解決に向け、１年間取組む。具体的な研修メニューを学校や関係機関に提案して要請を待って応えるのではなく、今までより積極的かつ集中的にチームを組んで支援する。
・　楽しい学校生活を送るためのアンケート「Q-U」(QUESTIONAIRE-UTILITES 以下、「Q-U」と記す）により、子どもたちの実態を知る。また、管理職・教員用アンケート調査から、教職員の意識の変容を調べる。
・　心の教育センターが提供してきた取組が、温かい雰囲気のある学校づくりにどう効果をもたらしたかを考察し、本支援事業を検証する。

３　研究内容

(1)　基礎研究

①　土佐市、小中学校の実態把握

土佐市の地形は、平野、山、川、海と、起伏と変化に富んでおり、高知県の縮図のような土地に、小学校９校と１つの分校、中学校３校がある。

地域の特徴として、幼い頃より同じ人間関係で進学進級していくことが多く、人間関係の固定化が見られるようである。したがって、中学校に進学しても人間関係を築くことが苦手な子どももいるようで、その不登校数は、高知県平均より高い水準で推移している。

②　楽しい学校生活を送るアンケート「Q-U」の有効な活用と人間関係づくり

温かい雰囲気のある学級とは、教師の描く学級像を児童生徒に求めるのではなく、児童生徒と教師が共に考え創っていくものである。楽しさや喜びを中心にリレーションの育成を前提としたルールを確立することである。「Q-U」は、学級の様子を客観的に把握でき、日常観察や経験などによる勘に頼った学級経営ではなく、正確なアセスメントに基づいて対応し実践していける心理テストである。

また、「Q-U」は、学級生活の不適応、不登校、いじめ被害を早期に発見できる尺度としても活用できる。

(2)　実態調査

「Q-U」集計から見る児童生徒の意識について

①　小学校 516 人のデータを基にした、全体的な傾向。

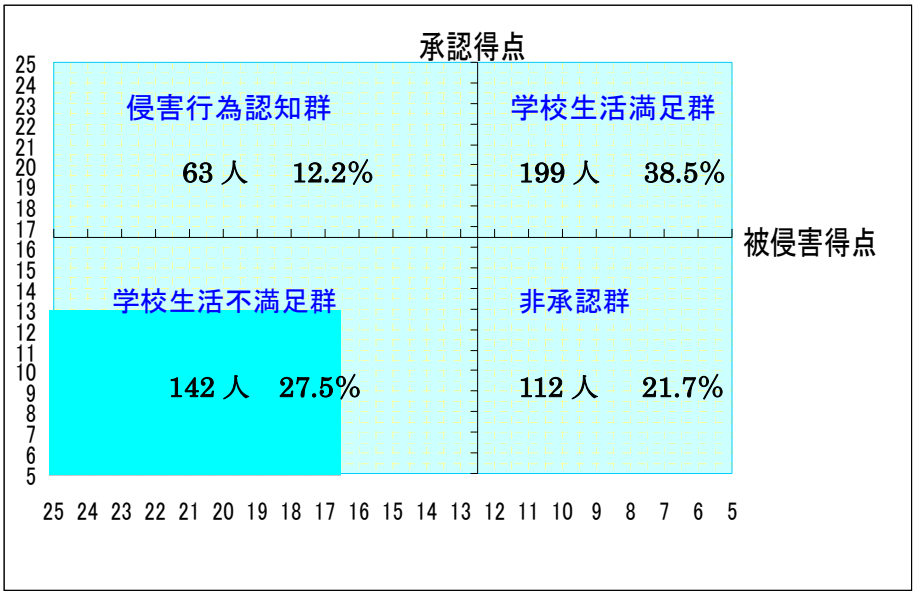


図２　「Q-U」による土佐市小学校の傾向

支援プロジェクトでは、温かい雰囲気のある学校をつくるために、どのような支援ができるかを伝え、まず、子ども達の思いを知ることができるQ-Uの紹介をした。

土佐市教育委員会は、小・中学校２学年の実態把握のための「Q-U」アンケートの予算化を行い、左記のような集計結果を得ることができた。

この「Q-U」アンケートの実施により、学級集団の全体把握と児童生徒個々の状態を知ることができ、学級・学校生活への不適応、不登校、いじめ被害の可能性の高い子どもを早期発見することができた。小学校のデータを全国の小学校の４～６年生の学級平均値と比べると、侵害行為認知群は 2.8%低く、非承認群は 1.7%高いということが分かった。

② 中学校 606 人のデータを基にした、全体的な傾向。

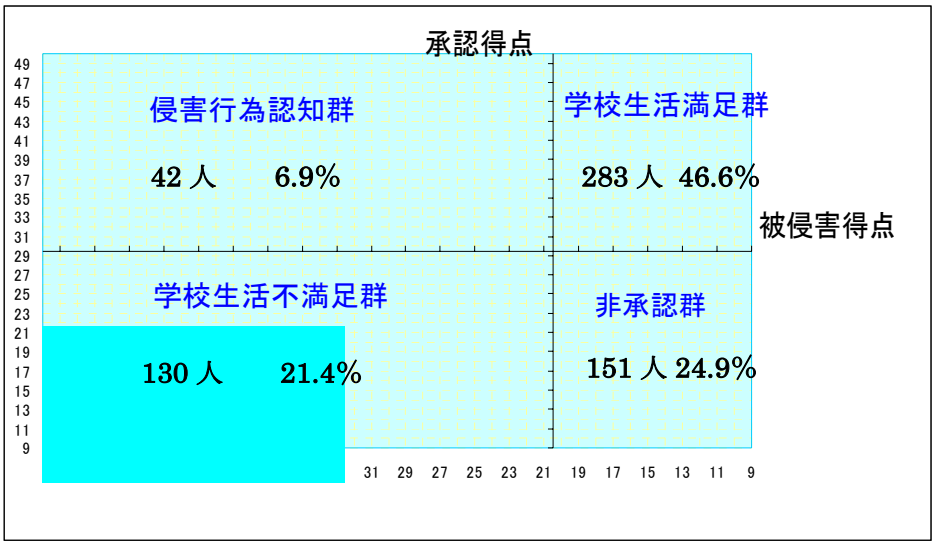


図３ 「Q-U」による土佐市中学校の傾向

それに対して、中学校の現状を全国の学級平均と比べると、学級生活満足群は 11.1%高く、学級生活不満足群においても同数の 11.1%低い結果となった。

また、非承認群は全国の学級平均値と比べると 8.7%高く、侵害行為認知群は 10.1%低いということが分かった。

③ 各学級の実態

「学級生活満足群」が全国平均より高い学級と、「満足・不満足並存型」の学級があった。

(3) 具体的な学校支援

① 土佐市小中学校への研修

心の教育センターが提供できる研修メニューを提案し、各校が選択した内容について研修会を実施した。

ア 主な研修内容

(ｱ) 心を育て、温かな人間関係を育む学級経営について

○ 「Q-U」の理論と活用方法について
○ 「Q-U」の結果分析の見方と今後の具体的取組
○ 心の冒険教育、構成的グループ・エンカウンターの理論と演習
○ ピア・サポート活動の理論と演習
○ 特に支援が必要な児童生徒への具体的な対応方法
○ 子どもの見える教師とは

(ｲ) 不登校の理解と支援について

○ 夏休み明けの不登校を防ぐための具体的な方策
○ 子どものサインを見逃さないために（保護者対象）
○ 特に支援が必要な児童生徒の親へのかかわり方
○ 保護者と教職員対象の講演会

② 小学校への支援授業による仲間づくり

ア 土佐市立Ｐ小学校「Q-U」結果

・ 学校生活満足群 ９人 50%
・ 学校生活不満足群 ４人 23%

・　非承認群　　５人　27％
・　侵害行為認知群　　０人　０％

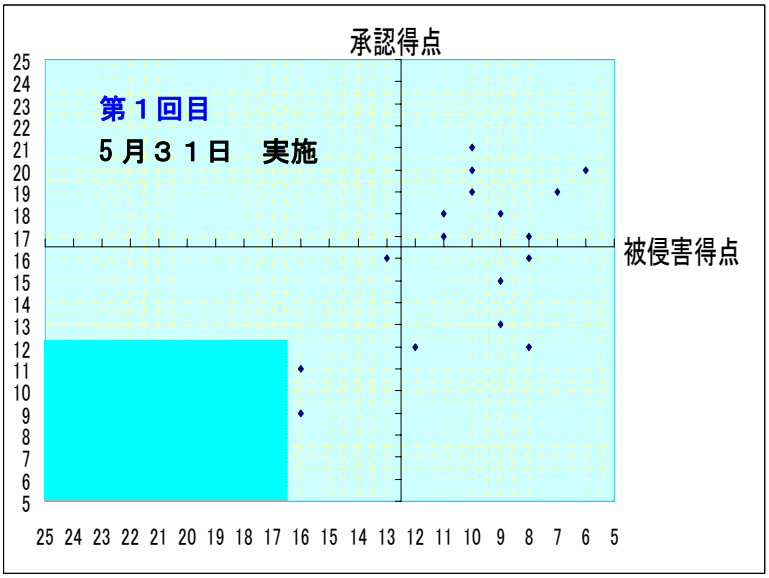


図４　土佐市立Ｐ小学校　第１回「Q-U」結果

半数の児童が、現学級にほぼ満足していることが分かった。しかし、要支援群の領域に気になる３人の子どもたちがいた。担任との意見交換で、非承認群と不満足群の児童には、授業の中で、一人一人を認める声かけをしていく確認をした。また、７月の構成的グループ・エンカウンターの手法を活用した支援授業では、友達理解を深めた。

11 月の５・６年生合同バスケットボールでも、支援者から声がけをするように心がけた。また、担任も T. T. として主体的にかかわり、「Q-U」実施後は、丁寧な個人面談をすることになった。

イ　土佐市立Ｐ小学校への支援授業例　（全４時間）

担任より、土佐市立Ｐ小学校の子どもたちは「幼い頃より顔ぶれが同じで、人間関係の固定化が進んでいる。」ということや、「何とかして互いを認めて行けるような集団を築き、他学年とも仲良くしていければ。」という話を伺った。そこで、体育科授業（合体）を通して、友達の良さに気付くことをねらいにした。

主題　自己課題に力いっぱい取り組み、かかわりあって楽しく運動することにより友達の良さに気付く。

合同バスケットボールの４視点
・　人間関係の手法「これからよろしく」「ごちゃまぜＢＩＮＧＯ」「どっちがいい」など
・　学習めあての設定（課題に迫るための個人とチームのめあての焦点化）
・　話し合いの場の保障（チームとしてのめあてや人間関係を円滑にするための手立て）
・　評価カードへの記入（人間関係づくり等の活動を振り返り、感想を全体に発表する）

写真１　評価カード発表場面

写真２　構成的グループ・エンカウンター

〈感想文より〉

- ６年生と質問し合って、その６年生のことがよく分かって楽しかった。
- あまり話さない人のことも分かって楽しかったです。ゲーム感覚で出来たので楽しかったです。
- 簡単と思ったけど、「ビンゴ」にならなかった。もっと時間があったらいいなあと思った。
- 相手のことをよく知ってないと質問できないことだから質問して良かった。
- ５年生に聞いて、その人のことが分かったので良かったです。またやりたいです。

第２回目「Q-U」アンケートの①③⑪の子どもたちは、５月に実施した第１回目「Q-U」アンケートで、学級生活不満足群にプロットされた子どもたちである。

今回のアンケートでは、①③の子どもの得点が高くなっている。

⑪の子どもについては、日頃より自己肯定感が低いため、大きな伸びはなかったものの被侵害得点が少しだけ良い方向に移動した。

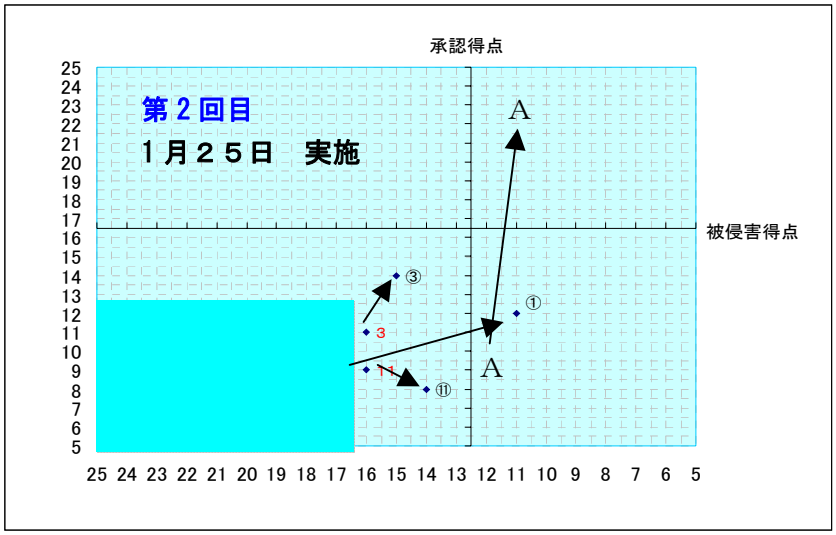


図５　土佐市Ｐ小２回目「Q-U」結果

実は、学級担任が一番心配していた児童にＡがいる。Ａは、思うように自分の考えを言葉にできないことから、周りの子どもから距離をとるようになっていた。そこで、合同バスケットボールでは、ペアづくりに配慮し、自己評価カードを使い発表する際にも意図的に指名するなどして、Ａの存在感を全体にアピールするようにした子どもである。納得がいく良好な関係とまでは至っていないが第２回目「Q-U」アンケート結果では、学級生活満足群に位置していた。

〈感想文より〉

◇　私はとてもボールが苦手で、しかも〇〇先生の授業がバスケットだったので、とてもショックでした。それに、私は人を信頼することがうまくできず不安で一杯でした。試合の時も、足がすくんでしまって自由に動くことができませんでした。

　でも、最後の授業でやっとボールが取れて嬉しかったです。まだボールは苦手だけど、苦手だからといってさけたりせず、少しでもバスケットが上手くなったらいいなと思いました。

◇　僕はバスケットをやって、普段はしゃべらない女子やあんまり遊ばない５年生と一緒にできて、楽しかったです。声を一緒にかけあったりするうちに、一緒に遊ぶようになりました。

それに、他のチームともバスケットをやって、２年生の時、あまり仲が良くなかったけど、今ではとても仲が良くいつも遊びます。本当にバスケットをやって良かったです。

◇　最初はチームワークがバラバラだったけど、２回目３回目とだんだんとみんなの気持ちが一つになってきました。改めてキャプテンの大事さが自分なりに分かってきました。

4　新事業の検証

本事業、「温かい雰囲気のある学校づくり支援プロジェクト」の提案が、学校のニーズに合った研修プログラムとなったのかアンケートにより分析する。

(1)　管理職用アンケート集計結果

Ｑ２　温かい雰囲気のある支援プロジェクトでは、次の内容を提案しました。次のａ～ｎの中で、校内研修として実施（活用）された研修番号に〇印を記入してください。

ａ　子どもの見える教師とは
ｂ　「Q-U」の理論と活用について
ｃ　「Q-U」の結果分析の見方と今後の具体的な取組について
ｄ　不登校児童生徒の理解と支援について
ｅ　夏休み明けの不登校児童生徒を防ぐための具体的手立てについて
ｆ　特に支援が必要な児童生徒への具体的な対応について
ｇ　保護者理解と対応について
ｈ　心の冒険教育の理論と演習について
ｉ　ピア・サポート活動の理論と実践について
ｊ　構成的グループ・エンカウンターの理論と演習について
ｋ　チーム支援の理論と実践について
ｌ　授業参観とその後の担任支援
ｍ　子どものサインを見逃さないために
ｎ　夏季講座など
「小・中学校生徒指導推進講座」「保健室における相談活動研修講座」
「教育相談推進講座」「心の教育講座」　「不登校児童生徒支援講座」
「心の冒険教育講座初級・中級・上級」　「子どもサポート学習会」

表１　小・中学校管理職の合計数

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n
小学校計	7	17	16	9	6	11	6	2	1	7	5	2	4	4
中学校計	0	7	7	5	3	2	2	2	3	4	0	2	0	1
合　　計	7	24	23	14	9	13	8	4	4	11	5	4	4	5

Ｑ３　この支援プロジェクトを実施してどんな成果や課題がありましたか。（一部抜粋）

〈成果〉

・　「Q-U」テストの結果分析の見方と今後の具体的な取組を校内研修していただき、学級の状態を具体的に把握することができ役立てることができた。
・　教職員が児童の遅刻や欠席に対して「どうしたのかな」と考えるようになり、いつも学級経営を振り返り、早期に対応できだした。
・　「Q-U」と実施後の分析、その見方対応について具体的に教えていただき、全職員が共通理解できたことが大変良かったと思います。
・　子どもに関する課題を担任だけではなく、教職員が共通課題とすることによって、共に課題解決に向けた取組ができる。また、自分だけの考えでなく他の意見等も参考にできるので大変よかった。
・　「Q-U」の理論と活用について大変勉強になった。分析と取組みについても校内研にも入って頂き有り難かった。担任の見えていない子どもの姿が見えて良かった。本校の自尊感情についての研究とも関連があり、大変参考になった。

〈課題〉

・　全教職員にかかわる内容以外の点では、まだまだ意識化や理解が弱い。１回でよしではなく定期的に繰り返し研修することが必要だが時間的に余裕がない。
・　不登校傾向の見られる児童、今後心配される児童とその家庭に対して全校体制で支援など、進めているが、なかなか改善されない。むしろ増加傾向にあり、もっと就学前か

らの取組が必要ではないかと考えている。

・　校内研修(毎週月曜日午後 4:00～)の時間帯に合わせて実施したいが、できたら長期休業中に実施できたら有り難い。

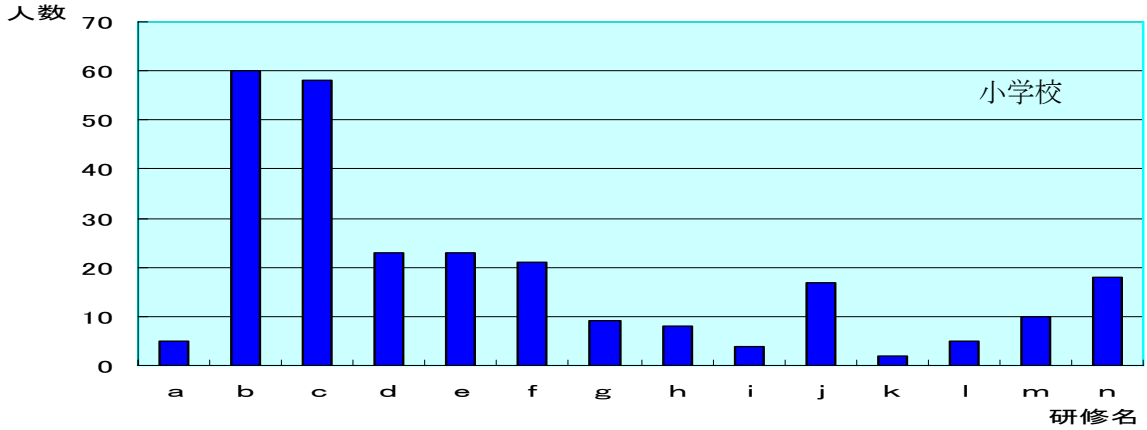
Ｑ４　その他、困っていることやご要望等があればご記入ください。(一部抜粋)

・　子どもに対しての指導、授業の向上より、保護者とのかかわり（対人関係能力）が弱い教師がいる。同僚に助言を求めることはもちろん大事だが、一人で問題を解決する能力（保護者とかかわる問題の時）を身に付けてもらいたい。

・　「Q-U」テストを実施し、クラスの状況を公開できるような状況にあることは成果の一つだが、クラスの変容を確認するための費用がない（予算）ことが一番の課題ではないだろうか。

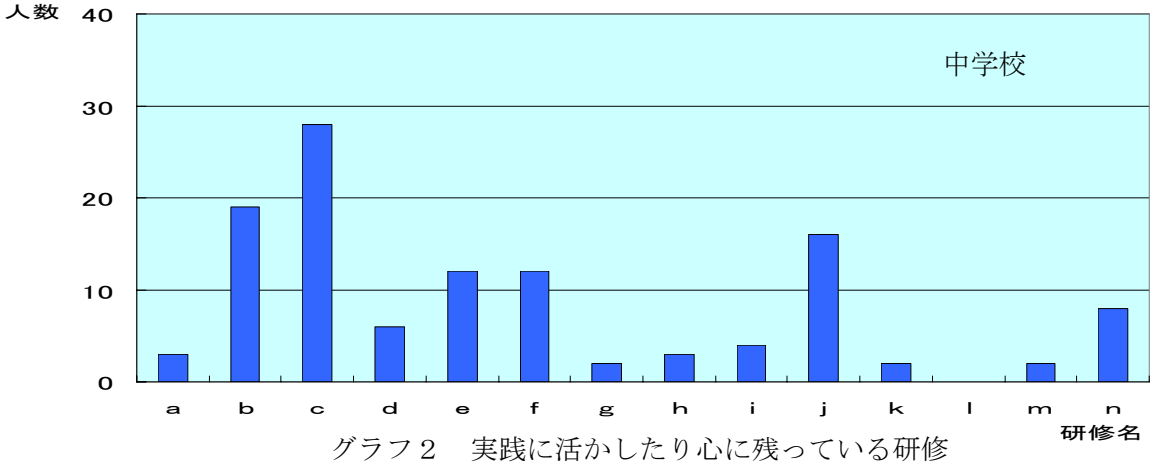
(2)　教員用アンケート集計結果

Ｑ１　温かい雰囲気のある学校づくり支援プロジェクトはどうでしたか。a～ｎの中で、自分にとって実践に活かすことができたり、心に残っている研修があれば、その記号を○印で囲んでください。



グラフ１　実践に活かしたり心に残った研修

b	「Q-U」の理論と活用	(60 人)	60.0%
c	「Q-U」の結果分析の見方と具体的な取り組み	(58 人)	58.0%
d	特に支援が必要な児童生徒への具体的対応	(23 人)	23.0%
e	不登校児童生徒の理解と支援	(23 人)	23.0%



グラフ２　実践に活かしたり心に残っている研修

c	「Q-U」の結果分析の見方と具体的な取り組み	(28 人)	58.3%
b	「Q-U」の理論と活用	(19 人)	39.5%
J	構成的グループ・エンカウンターの理論と演習	(16 人)	33.3%

Ｑ２　Q1 で、研修の記号に○印を入れた方で、取り入れて実践されたことがあれば内容はどん

なことですか。その結果はどうでしたか。具体的にお願いします。（一部抜粋）

〈小学校〉

・「ほめほめジャンケン」というエクササイズをしたが、子どもたちの中から「友だちに褒められて嬉しかった。」という意見だけでなく「もっと褒めたくなった。」という意見もあった。

・　欠席の連絡を電話で受けた時に「具合はどうですか。」など、一言付け加えて見た。風邪とひとまとめにして初めには伝えられたが、その一言によって詳しく教えてくれた。情報の共有ができた。

・　夏休み明けの不登校児童を未然に防ぐために、気になる子どもには始業日前に家庭訪問保護者との情報交換し、始まってからは、すぐに子ども同士のふれ合い促進のエンカウンター等を実施した。心配された児童もすんなり学級に溶け込み、順調に２学期のスタートを切ることができた。

〈中学校〉

・　職員会で、子どものことが固有名詞で報告されることが増えた。行事の前や当日に配慮する場合、このように指導して行こうと言う共通認識が持てた。

・　冬休みは部活に入ってない生徒を集めてトータル５日学習会をしました。冬休みの様子を話したり宿題を一緒にやって、すっきりした気持ちで３学期を迎えるようにしてみました。結果、全員初日から登校できている。

・　生徒の行動の理由を考えて対応するよう心がけている。

Ｑ３　Ｑ１のａ～ｎの研修の中で、自分にあまり役に立たなかった研修の番号を（　）の中に記入し、おかまいなければその理由をお聞かせください。

表２　実践に役立たなかった研修など

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n
小教員	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	1	0
中学校	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0

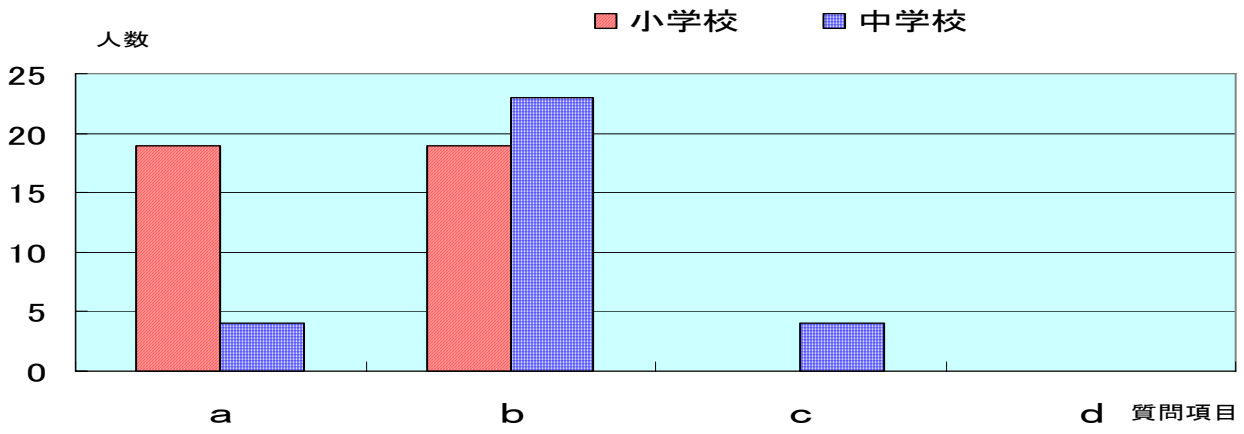
Ｑ４　「Ｑ－Ｕ」実施についてお聞きします。あなたの学級では実施しましたか。

表３　Q-U実施学年

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
小学校	3	4	6	7	8	8

	1年	2年	3年
中学校	2	3	3

Ｑ５　『ａ』（「Ｑ－Ｕ」実施）と回答した方にお聞きします。どのような感想をお持ちですか。



グラフ３　Q-Uを実施した小・中学校教員の感想

a　大変役に立った　　b　どちらかと言えば役に立った
c　あまり役に立たなかった　　d　必要性がないように思う

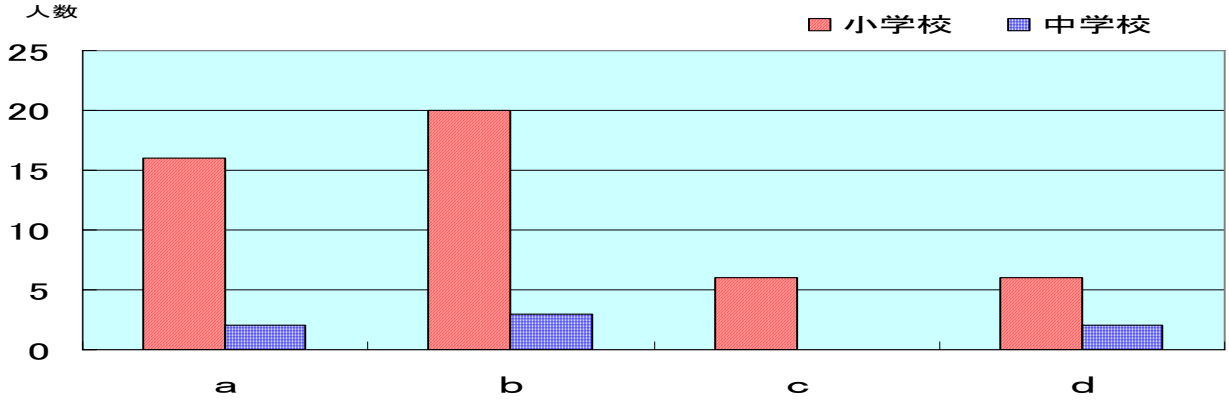
Ｑ６　Ｑ５を回答した方にお聞きします。それはどのような理由からですか。（複数回答可）

a　学級に対する子どもたちの思い（本音）を知ることができた
b　自分の予想と違った思いでいる子どもを知ることができ、客観的にクラスの現状を知る機会となった
c　自由記述欄を読むことで、子どもの現状や支援の必要性を知ることができた
d　フォーマルリーダー、インフォーマルリーダーの位置を確認し、学級経営に生かすことができた
e　グループ化している子どもたちの関係が明らかになった
f　ＳＯＳを出している子どもを知り、不登校の未然防止に役立てた
g　小・中連携に活用できる
h　Ｑ－Ｕの結果等を共通の話題にして、児童生徒の話ができるようになった
i　学級として支援を必要としていない
j　学級として支援の必要性を感じても、支援会議の体制ができていない
k　多忙な中、集計や分析にかける時間がない
l　時間をかけて分析したけれど、その後の活用の仕方が分かりにくい
m　温かい学級集団をつくる具体的な手法が分からない
n　これまでの自分の実践を否定されているようでイヤだった
o　アンケートのような数量的、客観的データは余り信じられない
p　授業時間を割いてまで実施する必要はない

表４　　Q-Uを実施した教員がＱ５と考えた理由

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
小学校	21	28	9	2	4	5	0	8	0	0	0	2	2	0	1	0	0
中学校	15	21	8	3	4	2	1	9	0	1	4	2	3	0	4	2	1

Ｑ７　Ｑ４で『ｂ』（「Q-U」を実施しなかった）と回答した方にお聞きします。どのような感想をお持ちですか。



グラフ４　Q-Uを実施しなかった小・中教員の感想

	小学校	中学校
a　自分の学級でも実施したかった	33.3%	25.0%
b　どちらかと言えば実施したかつた	41.6%	37.5%
c　実施の必要性はないと思う	12.5%	0.0%
d　その他	12.5%	25.0%

Ｑ８　現在、学級経営や心の問題などで気になっていることや困っていること、また、今後研修したい内容等何でもお書きください。（一部抜粋）

〈小学校〉

・　温かいそして子どもたちが安心できる学級を目指してきた。また、笑顔を絶やさない教師でありたいと考えた。しかし、子どもたちの中には、厳しく指導しないと教師を甘く見てしまうことがある。心に受け止めてもらえるように指導しているつもりだが、怒って言うことを聞かさなければいけない現状がありさみしい・・・。子どもたちがやる気を出して取組む、そして学級集団が高まる方法をもっと教えてほしい。

・　２学期になり、不登校しぶりが顕著になってきた児童について、見立てと支援方法が現在自分が考えているものでいいかどうか分からないし、校内でも検討してもらうことになるとは思うが、専門家の意見も伺えたらと思う。

・　ＡＤＨＤ児の対応と保護者への啓発。自分の中で折り合いがつかない子（やりたくないけど、まあやってみようと思える心）へのこれからの手立てや、なぜそういうふうに育ったのか・・・もっと詳しく学びたい。

・　不登校の子ども、保護者の対応。（怠惰な不登校児度が多くなった。）医療機関とタイアップしているようだが、医療機関側の要求が多すぎて学校との連携ができていない。

・　Ｑ－Ｕを通して、子どもの思いを知ることができたが、どのような支援をしたらよいか、学級経営にどう生かしていけばよいかを具体的に学びたい。

〈中学校〉

・　必要最小限の時間を取り、共通理解が大切である。ケースによって状態が違うので、一つのデータとしての活用の仕方をしないと、子どもとの対応、判断を誤る危険性がある。

・　様々な形でＳＯＳを発している生徒がいるが、それぞれの対応方法が違うので支援について意思統一ができにくい。

・　心の問題で悩んでいる子どもの保護者に対しての支援をどのようにすればいいのか。

(3)　集計結果の分析

温かい雰囲気のある学校づくり支援プロジェクトアンケートの配布は平成 17 年 12 月 14 日・15 日の２日間を使い、各校に趣旨説明し理解をいただいた。そして、回収日を翌年 1 月 16 日とした。その結果、管理職については回収率 100%、教員は 164 名中回答者 148 名であったため回収率 90.2%である。

①　「学校支援」の立場

ア　管理職

アンケートの記述部分を読むと管理職用からは「Q-U」に関した記述が多く、校内研修会などで共通理解を図ったことで、子どもたちをしっかりと見据えることができたと感じていると言える。また、今回提案した人間関係づくりの内容を学校教育目標にしている学校もあり、関連があって有り難かったと思っている管理職もいる。このようなことから、下記のように分析する。

「Q-U」の実施により、教員が主観だけでなく、客観的に児童生徒理解を深めるようになってきたと感じている。

イ　教員

「構成的グループ･エンカウンターを中心とした各手法を実践した。」という記述が多かった。即ち、校内研修などで学んだ内容を学級の子どもたちに活かしていこうとするその姿勢から、下記のように分析した。

人間関係づくりの手法を学級経営に活かし、子どもたちを肯定的に見る意識が高まってきたと考えられる。

② 「提供した支援や手法」の評価

ア 管理職

心の教育センターが実施した取組については、「今後も継続的に支援していただきたい。」「次年度につなげたい。」「具体的なアドバイスをお願いできればと考えている。」など、研修会によって、教員の指導力が高まり学校の雰囲気が変わりつつあることを実感しているような記述が多くあった。

教員の意識が高まってきたことから、次年度も予防的視点に立った研修を継続的に実施したいと考えている。

イ 教員

148 人中５人の教員が「Q-U」の必要性をあまり感じてないようであったが、心に残っている研修や実践してきた内容から分析すれば、やはり「Q-U」は学級の人間関係の状態を把握する手段として有効であった。

96.6%が支援プロジェクトの研修を良かったと評価している。（「Q-U」の結果分析と今後の具体的な取組）

5 まとめ

(1) 支援プロジェクトの成果

集中的に支援してきた研修回数 45 回。この中には、土佐市全体の教員を対象とした夏季研修会や「Q-U」実施後の担任支援も含まれている。集計結果の分析からも明らかとなったように支援プロジェクトは十分評価されていると言える。

① 各学校２学年以上で実施した「Q-U」アンケート集計の結果から、児童生徒の内面が分かった。そして、気になる子どもへの支援の方法を全教職員で考えることにより、教員間の共通理解が深まり個にあった援助ができるようになった。

② 教員が人間関係づくりの手法を取り入れ、温かい雰囲気のある学級・学校づくりがより推進されるようになった。

③ 土佐市の教育改革検証より、生徒指導や教育相談の研修者数は（小・中自主研修）小学校が昨年度の５倍、中学校は昨年度の 11 倍であることが分かった。特に不登校対策については各学校の先生方の参加が多く、児童生徒理解の意識が高まっている。

以上のことから、不登校や非行問題をはじめ児童生徒の問題行動の発生や低学力、教職員の資質の向上など、市町村の抱える諸問題解決の糸口が見えてきたように思う。

(2) 今後に向けて

1 年間、優先して取組んで来た、土佐市の温かい雰囲気のある学校づくり支援プロジェクトは終了した。今後の方向性に向けて留意しておきたいことは、

・「Q-U」集計後の活用の仕方が分からない 11.6%。

・数量的、客観的データは信じられない 12.9%。

という先生方の意見を真摯に受止め取り入れることである。きめ細かな研修を続けていくことが重要である。

そして、今後の更なる取組として、

① **支援プロジェクトの継続** 各校との連携を密にした実態に合った研修会の開催。

② **個に応じた支援と担任支援を充実**　苦戦している先生へのアセスメント、二次的、三次的サービスの充実。

③ **行動連携の情報提供**　更なる教育行政の横の連携。

④ **県内全域へ（核となる教員育成）**　研究生、研究員、講座などに参加した先生によるネットワークづくり。

この４つの提案を、実践していくことである。いよいよ、平成 13 年度から始まった「第２期土佐の教育改革」最後の年となる。一人でも多くの子どもたちが夢や希望を実現し、満ち足りた輝く笑顔で一杯の学校を実現するため、一層の努力をして行かなければならない。

6　おわりに

今年度、共同研究としてかかわった新事業「温かい雰囲気のある学校づくり支援プロジェクト」は、私にとって一生忘れることのできない貴重な経験となった。心の教育センターからの主体的な提案内容や支援地域であった土佐市（小・中）の子どもたちをはじめ教職員の皆さん方の熱心な指導の様子が思い出される。特に、日ごろかかわりの薄かった中学校の現状や支援授業でかかわったＰ小学校担任の前向きな姿勢は、同じ教員として触発されることが多かった。また、この一年間、担当主事をはじめ、多くの先生方に教育相談に関する講話や実技を分かりやすく習うことができ、また一つ貴重な財産が増えたように感じる。今後は、より確実なものにしていくために、課題解決に向けた取組を実践していきたい。

【参考・引用文献】

石隈利紀・田村節子『チーム支援入門』　図書文化　2005
『平成 17 年度　土佐市の教育改革今後の指針』　土佐市教育委員会
『2005 年度　土佐市の教育改革検証』　土佐市教育委員会